

## 道徳の規範性を身体化する？： 民主的ヒューム主義の是非を見定める

蝶名林 亮 (Chonabayashi, Ryo)

創価大学

---

規範理由に関するヒューム主義によると、ある行為者が持つ規範理由は、その行為者が持つ何らかの欲求によって（形而上学的に、つまり、同一性関係として、構成関係として、あるいは基礎づけ関係として）説明される（Schroeder 2007, p. 2）。このような考えを持つヒューム主義に対して、ヒューム主義はわれわれが持たないと思われる理由の存在を許容し（残忍な行為を欲する人であればそのような行為をする理由があるとしてしまう、the too many reasons problem）、われわれが持つと思われる理由の存在を説明できない（自分の幸福や道徳に興味がなくとも両者を重視する理由があることを説明できない、the too few reasons problem）との批判がある。また、道徳的理由の説明を他者の苦しみなどではなく行為者本人の欲求によって説明することは道徳的理由を不適切な形で利己的なものにしてしまうのではないか、との疑問もある。

これらの問題に対して、ヒューム主義者からのいくつかの応答が提示されているが、本発表では特に Kate Manne による近年の試みに注目し、検討していく。Manne は、ある行為者が持つ規範理由は、その行為者の欲求だけではなく、（人間だけでなく動物も含む）他者が持つ欲求によっても説明されると主張する（2015: 126, 2017: 5）。Manne は何らかの意味で欲求と呼べるものによって全ての規範理由を説明しようとしているため、ヒューム主義の基本的な立場は維持している。一方で、ある行為者が持つ規範理由はその行為者以外の人や動物が持つ欲求によっても説明できるとする点で、他の多くのヒューム主義者と意見を異にしている。自分だけでなく他者の欲求もその行為者の規範理由を説明できるとのこの考えを Manne は「民主的ヒューム主義 (Democratic Humeanism)」と呼ぶ（2015: 127, 2017: 5）。

では、どのように他者の欲求がわれわれの規範理由を説明できるのだろうか。この点を説明するために、Manne は（規範理由についての言明でもある）道徳的言明が表しているものを一種の身体的命法 (bodily imperatives) として理解するという方針を打ち出す。心の哲学において、痛みや空腹感、渇き、痒さ、の心的状態を一種の命法として理解しようとする試みがある (Klein 2007, 2015)。たとえば、喉が渇くという心的状態の内容は、「何かを飲ませよ」という一種の命令 (command) であると理解できるかもしれない (Klein 2007: 519)。同様に、痛みについても、「痛みを伴っている状態から逃れさせよ」という一種の命令として理解できるかもしれない (Klein 2007: 520)。

Manne は道徳的言明が指しているものも同様に身体的命法として理解することできると考える

(2017: 17-20). たまたま道で出会った通行人を気晴らしのために蹴りつけるという行為について考えてみよう。この通行人はこのような形で蹴られることを避けたいと思うだろう。そして、この欲求の内実は、誰に対しても向けられている「自分を蹴るな！」という命法として理解できると Manne は主張する。Manne はこのような身体的命法が全ての人を必然的に動機づけるという考えは否定するが (2017: 20-22), ただ、たとえば問題となっている通行人とは個人的に何の関係もない人に対してもこのような身体的命法は向けられているわけであるから、その身体的命法によって動機づけられる人も実際にはいるだろうと主張する。「自分を蹴るな！」という命法によって全ての人々がたまたま出会った通行人を蹴ることを控えようと動機づけられるわけではないが、この命法自体は全ての人に対して向けられているものであり、その意味において道德の規範性が特徴的に持つ普遍性も説明できると Manne は言う (2017: 14-16)。

さて、Manne の提案をどのように評価するべきか。心的状態は、少なくともある程度のレベルでは、観察・実験の対象になるものであると思われるから、そのような状態によって道德の規範性を説明しようとする試みは、自然主義的な道德的実在論を擁護する方途として、一つの有力な仕方であるだろう。一方で、Manne が提案するように、欲求と呼ぶことが出来る心の状態を本当に身体的命法として理解できるのか、疑問が残る。その一つの理由は、痛みなどを身体的命法として理解するという提案を打ち出している Colin Klein 自身は、痛みなどの感覚と欲求を区別し、身体的命法と見なせる感覚は欲求とは別種のものであると主張しているからだ (Klein 2015: 128)。

本発表ではこれらの問題を検討する中で、以下の考えを提示する予定である。即ち、① Manne の提案は、ヒューム主義者や自然主義者にとって魅力的なものであり、さらなる展開・考察に値するものであるが、②そのような展開・考察のためには、これまでヒューム主義者がそれほど行ってこなかった欲求に関する厳密な理解が必要になる。そして、③これらの作業が示唆する立場は、欲求によって規範理由を説明するという従来のヒューム主義とは少し違う、欲求だけではなく様々なタイプの心的状態が規範理由を説明する、という考えである。

参考文献：

Klein, C. (2007). “An Imperative Theory of Pain”, *Journal of Philosophy*, 104 (10), pp. 517-32.

Klein, C. (2017). *What the Body Commands: The Imperative Theory of Pain*, Cambridge, MA: MIT Press.

Manne, K. (2015). “Democratizing Humeanism”, in Maguire, B. & Lord, E. (eds.), *Weighing Reasons*, Oxford: Oxford University Press, pp. 123-40.

Manne, K. (2017). “Locating Morality: Moral Imperatives as Bodily Imperatives”, in Shafer-Landau, R. (ed.), *Oxford Studies in Metaethics*, vol. 12, Oxford: Oxford University Press, pp. 1-26.

Schroeder, M. (2007). *Slaves of the Passions*, Oxford: Oxford University Press.